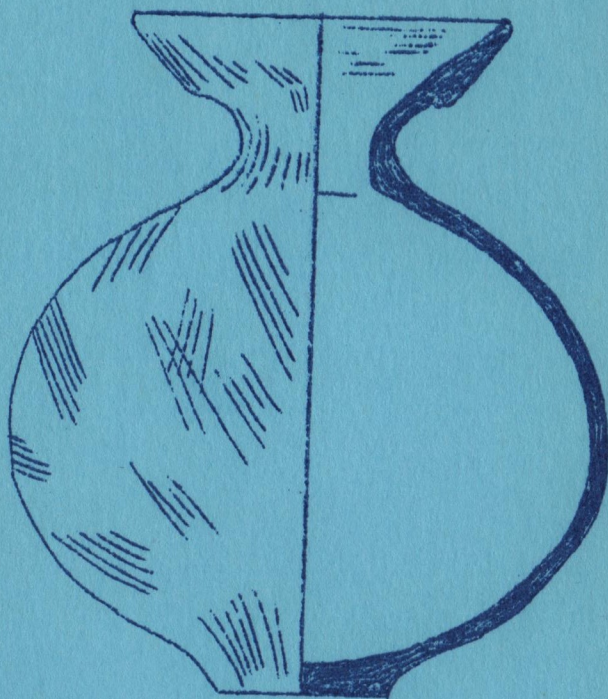


城西考古の歩み

第5部

1970

歩み



城西考古学研究会

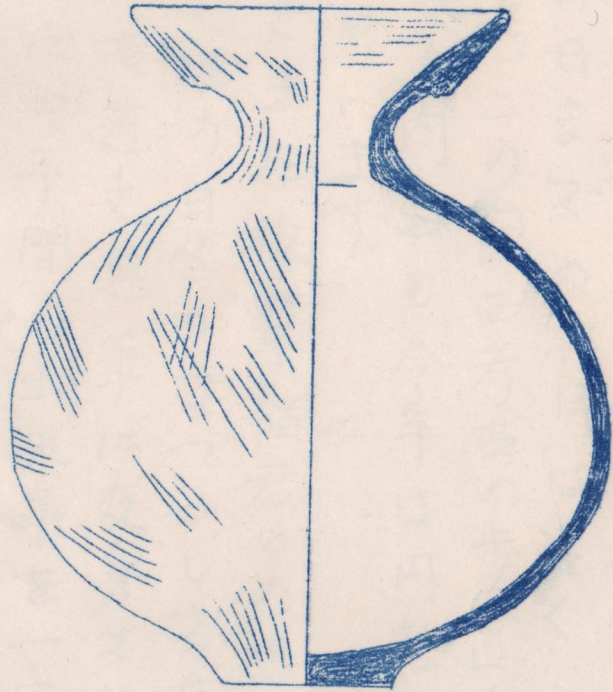
第5期生  
一同

城西考古の歩み

第5部

1970

歩み



城西考古学研究会

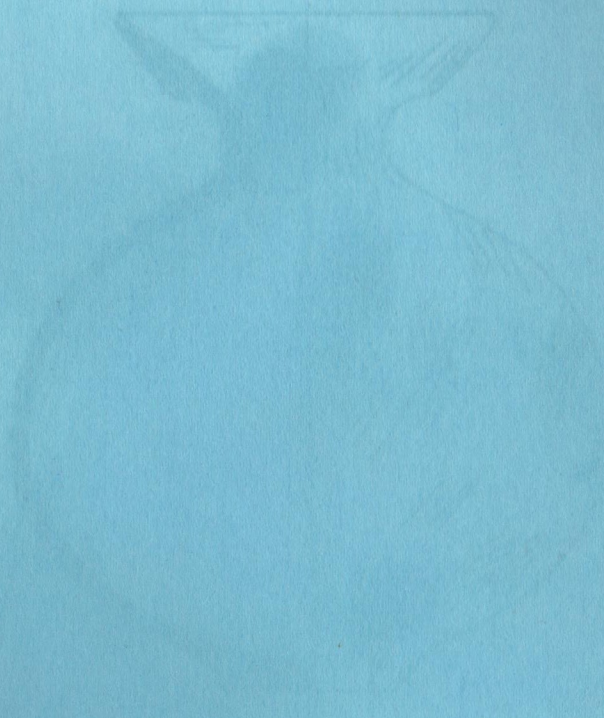
第5期生  
一同

城西考古の歩み

第5部

1970

歩み



はじめに

「光陰矢の如し」……誠にこの一言につまむ  
この四年間でした。私達が考古学研究会に  
入会してから、この日までの歲月は速く、目を  
見はるほびでした。この「城西考古の歩み」も発  
刊五部を迎えその内容も今年には円熟味を  
増していることと想います。

苦楽も共にしてきた後輩諸君との想い出や、  
なつかしい合宿、発掘の日々のなつかしさを心に、  
いつもの乱文乱筆を達文達筆に変身させて、  
精一杯この一冊に四年間の出来事を一字一句  
もろさず書き残すものです。

この一冊が長くこの研究会の発展継続する  
限り、後輩諸君の片手間に読まれることを  
望みつつ筆をおきます。

昭和四十八年 弥生 晴れる日

才五期生一同

目次

考古の歩み  
才五部歩み

はじめに	1
新入生勉勵	4
新入生紹介	9
角田氏との出会い	13
模擬発掘	21
歓迎旅行	27
松山高校にマ	35
夏季合宿	45
※若さリ体力	

へい／＼水が来た

川越祭り

高震祭(住居復元)

春季合宿

編集後記

81 71 63 57

新入生歓迎 (四月十三日)

十時より新一年生は体育館でオリエンテー  
ションがあった。十時研究室に集合して、新  
入生歓迎をすることになった。しかし、新  
時間を厳守したのは、原田さん、南さん、それ  
に酒井君、和田君、山中さん、朝倉さん、依田  
さんの七名でした。肝心の三年生は、一人も  
見えないのです。

とりあえずポスターを作り、机を外に運ん  
で準備を行なった。そのあと越生での合宿で  
実測を行なった。土器と石器、水と図版等の整  
理を行なった。そこで大騒動が起ったのです。  
合宿中、根岸さんが悩みに悩んで実測した地

が見当らなないので。箱詰めした沢田さんも、  
根岸さんも来てないので、どこに入れたかさ  
っぱりわからな。二階と三階を大探し、そ  
の時、三階で探していた酒井君が見つけたの  
です。「こ水は大事なものだから、きちん  
と箱に入れよう、よく覚えておいてくれよ」と  
言って佐野さんの愛車「ポルシェ」のガレージに  
やプラモデルの箱に脱脂綿を敷いて丁寧に入  
れたのは先生だったのです。そ水を忘れて、  
「たいへんだ、あれもない、どこに入れたんだ」  
と叫んでいたのであります。

そ水かすのちに風の強い中で部員激譁を行  
なった。本日の入部者は、男子四名、そのう  
ちの一人がポケットモンキーと清水英次君

でありました。

例によつてワイワイ、キヤキヤ騒しいク  
ラブは考古のみ、三年生は、沢田さん、井上  
さん、鈴木さんだけ、部長の矢田さんはまだ  
見えない、沢田さんが電話すると、もう十二  
時過ぎているのに、今起きたところだそうだ。  
和田君は、一年生に間遠えす水大あわて、顔  
を赤くして帰って来た。

その帰り先生のおごりで樽にて、お茶会、そ  
の間、井上さん、沢田さん、矢田さん、酒井君の四人  
は先生の研究室で新入生の女子三人に、一時  
間程クラブの説明をしていたので。その三  
人とは、田上左目さん、高岡紀久枝さん、塚田  
洋子さんでした。その結果、初めから興味を

示していった、田上さんをやっ、と入部させたの  
です。

### 新入生紹介

今年、昭和四十五年度の新入生は、男性が、  
経済学科、女性が化学科、真二つに分れて、  
いたのが何と言つても特徴的であり、先輩、  
後輩の見分けを困難にする様な人物もおり、  
今後、クラブの発展にきつと大きな力を貸し  
てくれることを望んだのであります。  
その人々とは、男性陣は、清水英次君、沢田

一成君、宇野正登至君、吉野俊之君、それに  
角田収君。  
女性陣は、高岡紀久枝さん、田上左月さん、  
成田紀子さん、塚田洋子さん、それに黒岩さ  
く代さんでした。  
そのなかで現在、なお活躍中の人々について、  
詳しく紹介してみたいと思います。

### 角田収氏

「へい、あなたが貞末さんですか」で始まり、  
独特の松本カラーをクラブに植えつけた貴重  
な人物であり、どんな時でも、年より若く見  
られることは決してなく、部会で司会者を勤  
めば、杉原先生、ドアを開けて、「ゼミ中で

すか、失れいまして。』と認めるほどの類  
希少な人徳を持つた人でもあります。

〔中野正登至氏〕

北海道の函館からはるばる出稼に来て、この  
城西で、高枚時代は、先輩でも、大学時代は  
後輩になるとはこれいかに？と考えることに  
なるとは、誰が知っていたであろうか、おそ  
らく、御釈迦様でも御存じなかつたであろう。  
また、発掘でのスツツプ姿は十代の人々に劣  
らず、見事であつたとか、なかつたとか。

〔吉野俊之氏〕

愛称キユウリまたはボケ、その由来は、言わ

ずと知れたことでありまして、目にうつるま  
まを口に出したところ、この様な愛称になつ  
たとか、よくこの<sup>世帯</sup>忙しい東京で生きて来られ  
たものだ。

この人、ある時、刃物持たせりや切りたがる  
……の心理にもれず、刃物を持つてみたの  
は良かったが、その試切りの材料に己を使う  
とは、流石、考古のキユウリちゃん……！

〔清水英次氏〕

ちよつともつたいない様な『ボケツトモンキ』  
などという愛称をもつ坂戸町は成願寺の住人。  
いつか、にぎやかな彼も、兄上様の前では  
蛇に睨まれたカエル同然とか？

年輩者の多い同学年において、時として、子供扱いされ、あの可愛いお目々ちゃんをクリクリさせているゴリラさんの弟のポケットモンスターちゃんであります。

### 〔高岡紀久枝氏〕

愛称、ゴイさん、これはもちろん二女から来たものである。ボーリングのボールを重く持てなさい人であったのに今では、スコップ操作は、手慣れたもの、関西女性の芯(真)の強さをマジマジと見せてくれる人である。大の男四人と対等に打ち打ちで遊ぶバイタリティーの持ち主でもあるが、反面、お茶とお花とやはり女性らしさはかくせない様である。

### 角田氏との出会い

角田収：前歴は前に述べてありますが、昭和四十五年度の考古学研究会において、角田氏との出会いについてほど今なお語りつかれている事はなく、故に、この出会いについての立合人として書かざるを得ないので、ここに当事の模様を忠実に、事細かに再現する事を誓います。

時は昭和四十五年春、三時限目、この時私は講義があったか否か又はサボっていたか定かではないが、仕事のことと私が先生に呼ばれ、現在の経済学部三階にあった先生の研究室に行った時に、この歴史的出来事が起こったのでございませう。

私が先生に仕事のことと何やら聞かされていた時に、  
「トントント」とドアをノックする音がしたので、

先生「カムイン」と言う。

ドアを静かに開けて入ってきたのは、当時で年齢は二十  
七、ハダ無精髭をのばし、ネクタイをした男でありました。  
その男は一見刑事風、よく見ると役人風、実は素浪  
人のようで何か書類らしき物を脇にかかえているのでし  
た。この男を見て先生は自分が何か悪いことをしたかと思  
ように私の顔を見て、そして男に言ったのです。

先生「どちら様ですか？ 私に何か御用ですか？」

と言うと、男は初めてあの無精髭の口を開いて、

男「ハイ。貴方が貞末さんですか？」

この時の会話が貞末先生のことを「サダマツ」と非常に真面

目な顔で言ったので、私は一瞬笑い出しそうになったが、  
いつとこらえていたのです。

先生「いいえ、サダスエですか？」

男「ハイ。貴方が考古学をやっておられるのですか？」  
と、男は聞き返した。

先生「そうです。私が考古学研究会の部長ですが……」  
そう言うとき男は初めて安心したような顔をして、

男「ハイ。あのう……私、考古学研究会に入りたいのです

が……」

と、この一言で先生はホッとしました。後で聞いた  
話では、この時先生はこの男に殺されるのではないかと思  
ったかと思わなかったか……

先生「そうですか。そのことですか。あなた考古学をやり

たいのですか。L

男「ええ、ちよっとやってみたくなりまして、ハイ。L

先生「御名前は何？」L

男「ツノダ オサムです。L

先生「珍しい名前ですね。どのように書名のですか？」L

角田「角田 収です。L

先生「あなたの近くに遺物か何か出るのですか？」L

角田「家のウラで少しばかり。L

先生「そうですか。ここに居るのが考古の副会長の酒井君

です。酒井、彼を下の研究室にお連れしなさい。L

酒井「ハイ。L

そして私は角田氏を考古の研究室に案内し、部員に紹介したのです。この時の部員の様子は皆さんそれぞれに

角田氏の顔もごらんになっていただければおわかりになると思っています。

この先生と角田氏との出会いは、先生が考古学研究会の部長をしておられる限り、又、角田氏が卒業するまでおそらく、それ以後、毎年必ず皆さんに話して聞かせるでしょう。また後世への語りぐさになることでしょう。

### 模擬発掘

四月二十四日（金）に部会が開かれ、市川さんの議長の下で模擬発掘について話し合った。

その結果

日時 四月二十九日午前九時集合（研究室）

場所 新しき村

器材運搬 一、二年生

と決定した。その時、板書をしていた山中さん。

器材運搬……一年生と二年男子と書いたのであり、  
「ソリヤナイデー。山中さん。」と声をあげたのは  
二年の男子でした。それから、一年生に「何か質問、あるい  
は注文はありませんか？」と聞くと、すぐに「めし。」  
という声が出たのでした。弁当は大学周辺の女子とかい  
ろいろあったのですが、結局、各自持参と決まったのであ  
る。

その帰り、「帰ろう。」という言葉で、土器実測をして  
いた一年生の女子もあわてて荷物をまとめていたとこ  
ろ、それまで本棚作りをしていた根岸さんがほうきを持っ  
てそうじをし始めたのです。ッやつと土器から解放され

帰るんだわ。」と思ったでしょうに、一年生の女子は、またまた  
あわてて掃除を始めたのであります。

今では考えられないと思うのですが、研究室を電車の発車  
時刻より十五分位前に出たのに乗り遅れてしまったのである。  
きつと駅まで遠かったんですネー。比川商店で、例によつてパン  
おせんべい、牛乳等 お腹に入れている所へ清水君、沢田君が  
通り過ぎたのである。ところが、何を思ったか、返ってきたのであ  
る。そして、山中さんの持っていたおせんべいを食べてしまったので  
ある。そして「発掘って、全員が握るんですよ。」と聞いたのである。  
「ちがうよ。一、二年生が握るんだよ。」と市川さんが言う。「じゃ  
あ、このおせんべい返すから山中さん一緒に握りませよ。」と言  
い、食べかけのおせんべいを出しました。「いいえ、私は監督よ。」  
と言われ、二人はズッコケていたのである。

そうして、四月二十九日が来たのである。

雲一つないような天気には恵まれ、少しの時間の遅れはあったが、予定通り始まったのである。

大学より歩いて十分と言っていたが、器材が重かったことと、暑かたことで、新しき村までとても長く感じられたのである。林の中や田んぼをぬけ新しき村に入り、堀合さんや沢田さんの後について、東の方へ向かったのである。「発掘場所はどこかな？。まだかな？。」と見ずわしなから歩いてみると、「ちがうよ、ちがうよ、こっちだよ。」と矢田さんの声があるのである。先に歩いてきた我々は逆方向に歩いていたのであった。目的地にいた時はもう疲れしよっていたのである。

狭いところなので、トレンチを設定することになっていったが、グリットの方がはやい」との先生の御意見で、一ワシグリットに、二年生が一人、そのコーチとして三、四年が一人、つくことに決定し、開始された。

約六十センチ程でローム層に達したころ、昼食の時間となり、皆食欲旺盛で多すぎると思ったおにぎりも足りないほどであった。この様子は原田さんがハミリに納めたと思うので、興味ある方はドーゾ。

午後からは、水がふき出るという事件が起こったのである。一瞬ドキッとしたのであるが、よく見るとある人がスコップで水道管に穴をあけてしまったからなのであった。

田上さんが落ち込みを見つけ、五、六人がかりで拡張を行なった。この落ち込みが斜めに続いて、たために、頭の中に入れた夢中で掘っていた堀合さん、向谷地さん、根岸さんの上に、土がくずれてきたのである。結局土だらけになって掘ったこの落ち込みは何でもないことがわかり、この発掘での出土品は土器数片だけであった。

一段落ついたところで、新しき村の人達とバレーボールの試合

を行なった。どう見ても我考古が若さで楽勝するであろう  
と思っただのがまちがい。15:1 15:2 15:4 と完敗だったの  
である。昨年の野球といい、今回のバレーボールといい勝てなく、  
ガツカリしたのである。

埋め戻しは向谷地さん、根岸さん、武田さん、大沢君、山崎君が  
一年生と組んでダンプロを行なった。初めは元気だった一年生も回  
数が増すにつれて足はふうつき、スコップに乗る土が少なくなつて  
来たのである。特に向谷地さんと組んだ沢田君は「まいった。」の  
連発であった。

出土物は少なかつたが、無事、模擬発掘を終え、大学に帰つてか  
ら(六〇)教室で新入生歓迎を兼ねてコンパを行なった。現在で  
は強い清水君も、「大丈夫です。大丈夫です。」と言いつつ、真赤に  
なっていました。矢田さんはひしゃくにビールを入れ、「飲め。飲め。」  
と武田君や沢田君を追いかけまわし、酔いのせいか、またはこぼれた

ビールで床がすべるのか、皆、ころむながら追いかけてこもっていたの  
である。ビールはこぼれ、ビンは割れで、ごちゃごちゃした教室内で、一  
升ビンをかかえて先輩が飲むまで動かないでジーンと目を見  
ている人がいました。それが角田君だったので。初めはすわり込  
み作戦だったので、そのうち飲まないで逃げる先輩を  
追いまわし始めたからたいへん。またまた鬼ごっこが始まつて  
しまつたのです。

こんな具合で、最後の掃除は大変であつたが、発掘疲れは  
何のその、コンパも楽しく終えることができ、午後八時過ぎ  
の暗い道を、降りはじめた小雨にぬれながら家路に急いだ。  
……のびなくチンタラチンタラ、家路についたうでありま  
した。

新入生歓迎旅行 (五月十七日)

今回の新入生歓迎旅行は、バスの諏訪周辺の遺跡めぐりである。

朝六時に起き、寝い目をこすりながら川角組を引きつれて、川越駅西口へと向った。川越組は分散し、一つは和田君の所に数人が集まった様である。

午前七時、川越駅にはすでにバスが来ていて、和田氏の所に集まった者たちが来ていた。そこで我々は(男性だけと思いが)バス旅行という事なのでバス旅行につきもののガイド嬢の事を、どんなにかわいい女の子が来てくれるかと、ひそかに期待していたのであるが、バスに



乗り込んで見ると、開けてビックリバスの中、  
年頃は「一十二、三」の花もはじむ。花びらも  
ちっけてしまいいそうなブスで、いつも見あきて  
いる我、研究室の女たちかこれ程までに美し  
く、かわいさしく見えた事がなかつた。また  
このガイド嬢一人者ならいざ知らず、結婚し  
て亭主といっしょにこのバスに乗り込んでいた  
のである。あの亭主のはずかしそうな顔のな  
かつた事、非常にかわいそうであつた。この  
ガイド嬢の言う事には「本日来るはずのガイド  
の方が急に来られなくなり、代りに私が来る  
事になりました。ふつつかな者でございませ  
んが、よろしくお願いいたします。皆一同「そう  
でしよう、そうでしょう、そのはずですよ」と言

たとか、言わなかつたとか。  
この様な事で始まり、先生を初めに一同揃  
つたのでいざ出発。今日の旅行はバスが動き  
出す前か、夢も命望も失われ、一同ま白けし  
かし乗った以上は「……」。バスは一路中央高  
速を下り甲府まで得て諏訪湖へと向つた。我々  
は、ガイド嬢に見切りをつけて、そ水ぞれにギャ  
ギャー「さむい、で思、思、に車中を過した。こ  
の様な事をして、いる間にも諏訪湖に着き、あ  
いにくの雨に外には出ずバスの中から諏訪湖  
を望み、先生の説明で、この諏訪湖の湖底に  
は、諏訪湖底遺跡がある事を教わつた。諏訪  
湖を後にバスは諏訪神社へと向つた。諏訪  
は皆、単位を落さないように、無事進級、なす

びに卒業できまます様にと参拝した。御参の後  
は、霧ヶ峰へと向った。霧ヶ峰では、みんな  
の日頃の態度が悪いのか、又、バスガイドが  
ブスな<sup>お</sup>のか、霧ヶ峰高原は本当に霧かか  
ってしま<sup>っ</sup>た。霧ヶ峰を過ぎ白樺湖で休み  
尖石へと進み、尖石へ向う途中バスの運転手  
が道を間違えて少々おくれ<sup>て</sup>つ<sup>い</sup>た。尖石遺  
跡<sup>ご</sup>は、この出土品を尖石遺跡博物館に陳列  
して一般の人に公開してあり、我々も早くこ  
の様な遺物を陳列する所がほしいものだ<sup>と</sup>皆  
で話し合<sup>っ</sup>た。この尖石という名の由来は、  
そこにコケのはえ尖<sup>っ</sup>た大きな石があるため  
に<sup>つ</sup>いた名である<sup>の</sup>こと。この尖石遺跡を  
最後に今回の新入生歓迎会をか<sup>ら</sup>ぬた遺跡めぐ

りは終り、バスは帰途についたのである。  
川越についたのは夜の十時頃であ<sup>っ</sup>た。バ  
スをおりた<sup>ふ</sup>ツカレタ、ツカレタの連発、  
も先生だけは喫茶店に行こうとはりき<sup>っ</sup>てい  
る。我々もおせおそくな<sup>っ</sup>たのだから一時  
間も二時間も同じだと先生のあとにつづいた。  
エデンに入り、それぞれのみた<sup>い</sup>ものを注文  
した<sup>だ</sup>けで、だれも話をしようとする者はい  
な<sup>か</sup>った。

時は六月二十八日(日)、県立松山高校において、  
 埼玉県の考古学に関する会合が開かれた。我  
 ら勉強熱心な考古学研究会の面々はさっそく  
 出かけたのである。六月も末となると日射し  
 はまぶしく暑いようにも感じられた。九時に東  
 松山駅赤鳥居前に集合、しかし、その中に多  
 で電車に乗ってきた大物がいた。普通、定期  
 券を持ってきている人は坂戸町↑↓東松山間五十  
 円を精算するのであるが、ただ一人その男は  
 タダで出てきてしまったのである。それもそ  
 のはずその男はまるでキュウリのように細く、  
 小々のすき間なら勞せずに通じけでるの

松山高校にて、



である。「エへへ……僕夕ダで出てきちゃったも  
んね。」が本人の言葉であった。東松山住人の  
沢田洋さん、市川さんがこの日の案内役なの  
である。

時間がやや遅れたが(いつものこと)一路松山  
高校へと歩み始めたのである。総勢二十人ほ  
どで十五分程歩いて目的の地までたどりついた  
のであるが、何と皮肉なことがあるものだ考  
古学会は午後一時かゝりであった。休みの日はい  
つもお昼近くになつて起きるのに今日に限つ  
て早く起きたのに、運命のいたづらかな。し  
かしこれかゝり三、四時間どうやって時間をつ  
ぶそうか、という思案したあげく、結局  
丸木美術館へ行くことにした。また東松山駅

までトボトボともどろろなくではなうなかつた  
駅前かゝりはバスの便が悪く、今日は奮発し  
てタクシーへ乗り、丸木美術館へと向つてい  
った。そこは越辺川(オツペガワ)沿いにある風  
光明媚な場所であつた。この美術館を説明す  
るところである。日本は世界で唯一の原爆被  
爆国である。この被爆者たちの悲惨な姿を絵  
に描いたのが丸木夫妻なのである。館内は少  
々カビ臭かゝたが、木炭によつて描かれた黒  
と白による陰影は一尺悲惨さを物語りようであ  
つた。泣き、わめく人たちが、もうこの世の  
人ではなくなつた母親にすがる子供たち髪  
の原爆の原爆のおそろしさを訴える姿をまざまざと

みせつかれる思いであった。

美術館を見学し終えてかゝ下の川原へと降りていった。嵐山の方へ向かい、川をさかのぼりていった。田畑を通り石ころだぶつていったのである。橋があり、その川の川原を通り、歩くに歩き三十、四十分、やっとな影ふしいものが見えてきた。橋があり、そこにいる人たちは釣を楽しんでいたのた。しばふくはその釣水貝合を見物していたのであるが、さるまねの上手な清水君のこと、さつそく釣り竿を借りてきてあんな釣りを始めた。このあんな釣りというのは、都会や海辺に住んでいる皆様にはなじみ薄いと思うのだが、内陸の川しかない場所に住んでいる人たちは子供の頃かゝこの方法で釣りをしていた

のである

竿にはえさはつけない、針だけでよいのである。それを川の流れて上下に動かしてえすればよい。魚は動くものをみるとすぐかみつき、針にかかると動かさないのである。これはなんた川虫をさがさなくてもよい。手軽である。かしどうしても矢田さんだけは信じられない。遊ぶでも忘れて見入っているのだから釣れるんかよ

う?

「ええ、釣水ますよ、まあ見ていて下さい。」

と得意顔で清水君そうこうしているうちに三匹ほどになった。川の石を丸く積んでいけすをつくりそこに釣った魚をいれておいたのであるが、清水君の奮闘したかいかもなく、残念ながら魚は逃げてしまった。だが魚にしてみれば命がたすかったのだから幸いかもしれなかつた。昼食もオンボロバスを改造した食堂でとり、目的の松山高校へともどったのである。

松山高校には立派な埼玉県立校山高等学校の考古館がある。この建物は非常に古く、この形と同じのは松山高と深谷高校(根岸さんの母校)と県内にも教箇所しか残っていない由緒ある建物である。考古の資料も多く、さすが松

ぜ会った心境であった。この地域は有名な五領遺跡を初め、古墳など考古学的には専まれでており、その結果必然的に資料が集まってくるのではないだろうか。もちろん歴史もあ

いよいよ考古学会へ出席したのであるが、これがまた城西大学考古学研究会として恥ずべき結果となったのである。最初は二十名ほどであった部員が途中で教人消え、考古学会へ出席したのは十数人であった。と思うがこれが大変なことになってしまったのである。午後の日射しと遊んで疲れと、満腹感と、いつもの避とか二重にも三重にもなり、うとうとそのうちにくつすり、中にはいびきをかく人まで現

われ、眠いのを必死にこらえている人たちはは  
ずかしく冗があったら入りたい思いであつた  
のを眠っている人たちは果たして気付いたで  
あろうか。必死に説明をしている人、またそ  
れをじっと聞き入っている人たちに對しても  
申し訳なく出席して聞かないのに全員退室し  
てしまつた。途中から消えた市川さん、依田さ  
んその他の人たちは屋上や校内を案内してい  
ただいたそうであつた。考古学会は矢  
こうして一日は終わった。後悔もしていない  
敗に終わったが皆それでは後悔もしてない  
だろうし、別の意味で意義もあつたと思う。  
そ水は帰途につく人々をやさしく照らす夕日  
が示していった。

昭和四十五年

夏期合宿

正午に研究室集合のはずなのになぜか集まら  
ないのです。新夏の大田さんはバタ屋が火事  
で電車が遅れたのださうだ。『これでは、布団  
蒸しは、当然である。これからが楽しみだ。  
と、おっしゃつていた先輩がまりました。その  
ん、四年生は、最後の合宿とあつて、教育実習で  
北島直に呼んでくれることになり、全員集合  
であつた。参加者二十四名で合宿は開始された。

## 発掘の部

十日より発掘開始、発掘地は「毛呂山町旭台」であった。この発掘参加者にとって、とても忘れられない発掘であったに違いない。

まず、A・B二地点に分かれ、それぞれトレンチの設定を行なった。A地点はとても問題のある地点であった。それは、昔の「夜達」が住んでいたという小屋があったからです。サンサンと輝く太陽の下、時折吹く涼しい風の中で、作業は順調に進んでいったのです。と、本来ならばこうなるはずなのにこの涼しい風がいけないのです。おみやげを運んできてくれたのです。近くの小屋の想像しただけ……となるような臭いをおみやげにく

れるのです。

B地点はというと、これまたすごい、まむしが出そうなの草が生い茂っていました。この地点は、草刈りから始まったのです。

模擬発掘は、遺物が少なかったため、一年生はこの発掘を楽しみにしていたであろうと思う。しかし、初日目の遺物は、遺物は市川さんがA地点で発見した土器片一片だけだったのです。二日目には、ここからは何も出土しませんでした。ほぼ確定したのでありません。

「発掘とは、何も出土しないことがわかればそれで良いのである」

(貞末亮司)

結局わずか三日間であったが十三日で発掘が終わってしまつたのである。

昨年で5ヶ年計画も終り、今年新しい出発がある。まず始めとして旭台の発掘及び上台山、新しき村の遺物の整理である。今年の旭台の発掘は、我々考古学研究会が始まって以来、はじめて遺物にあたらなかつた年でありました。まず発掘場所が二ヶ所あり、一つは畑で、これはすぐくに掘れたのですが、この場所、ブタ小屋の隣にあり臭いこと、臭いこと、発掘がいやになつてきました。この場所は、いくら掘つても何一つとして、遺物が出ませんでした。そこで、ここをあきらめて、50m程はなれた雑草のはえた所を掘ることにした。ここを伐採して、掘り始めたのですが、ここも又、何一つ遺物が出ませんでした。この発掘を行なつてゐる間、我々は、今まで見た事のない儀式を見つけたのです。

これは、隣にあるブタ小屋のブタのかわいそうな儀式なのであります。食肉用のブタは、まずふとらす事が一つの目的であります。そのために外に出るエネルギーを止め、のエネルギーをためてブタをふとらせ様とするものであります。この方法は、オスブタのタマタマを切り取つてしまつてもかゝります。これによつて「向せず」にエネルギーを蓄積しようとするものであります。トウヒトと言へば、つまりパイプカットでございませぬ。我々は、ブタがギャーギャー、ブーブー、いながら、いたそうなる、あのかなりさうな声でなつてゐるのこそをなから、我々は自分の「向」を切りつけてゐるような気がして来ました。今回の発掘は、こんな事で三日間を終つてしまつた。

### 〔遺物整理の部〕

八月十四日より上台山、(夏冬)と、新しき村の報告書作成のための作業が開始される。

各班の構成は次の通りである。

(復元・整理) 617

。根岸・吉野・黒岩・成田・鎌倉、高小、利倉(四日より)

(地物・実測(田圃)) 612

。中川、鈴木

(土器・実測) 615

。井上、酒井山中、宇野、角田、田瀬

(拓本) 616

。沢田(洋) 和田・高樹、松保

(石器・実測) 612

。佐野、矢田、沢田(成)、清水、武田、原典、依田(6日より)

※没・没・没

班構成第一日目は、各班とも没が多かった。それも二三日たつと、慣れだせいか、それとも腕が上がったせいなのか、没が少なくなってきた。没とは、ともお金のかががるものである。たとえば、復元班では、石膏、ヤメ・タイン、拓本班では、拓本用紙、実測班では、トレーシングペーパー、すみ丸ペンとまとめることなど、夕顔になるのである。それを思いつくかどうかは知らないが、復元班と拓本班では、罰金制度を実施したのである。先生は、せっかく復元した土器を半分に割ってしまった。そこで、すぐに一五〇円の罰金が記録された。根岸さんは、メチャメチャになった土器を見て、班長の責任から、二〇〇円の罰金。おやつを届けに行つた私は、ちがうと親切(?)心をおこし、例の土器を接合して、先生を辛抱させたのである。石膏の部分がかさつとした間違えで割れてしまっただけに、待つてし

が、ちがうとした間違えで割れてしまっただけに、待つてし

まいりましたとはガリドジ子こと成田さんは、二〇〇円と記録  
したのです。この事をまじへるは、非常に良くない。口を続け  
ると、高頭になるからである。その張本人は、先生で、い  
つのもにか當の罰金は、白子、白子になっていたりです。また、  
拓本班では、拓本用紙が高いことと、節内まで買いに  
行かなければならぬ理由から、失敗、又は没であることに、  
罰金をとらぬるのである。没に直いた和用紙は、他班に物  
らなければならぬ。が、その他班でまた没  
に直かされたのである。石器班だったからだ。また一年生  
であるコイさん、この向田さんも慣れない拓本や実測  
に没？、どっしりだめですか？とため息ばかりついてい  
たものである。罰金はなかつたが没の多かつたのは、石器  
班、石器班である。この合宿でオケラ、豚姫、えこの  
ニクネームのついた田さん、同じ石器が三日ががって

も書けなくて、私が書くと出てる部会がへこんで見  
えるの、どう書いたさういんですか——とシュンとし  
てしまひ、矢田さんが一生懸命元氣付けていた。又、  
ある人は自分の絵心に自信をなくし、あめき出した  
のである。石器班の井上班長も石器班に来ては「没  
と言うのがかわいそうだし、と言って、通す訳にはいか  
ない。つういネエ——とハチマキした頭をかかえたので  
ある。その点地形実測班は、仕事も順調に進んでいた。

※へイ！ ヤメター——にはかなわなひ。

合宿となると決まって何かしうおもしろい言葉がはやるも  
のである。没に悩まされ続けると「没」なる言葉も「些細  
なことだいな——と片付けるようになったのである。それ  
に対して「そうたニヤ——と相槌をうつといふ調子でし

やべることだけが作業中の楽しみとなった。「ヨシ——」  
ネギシ——とおかしな発音で叫び回るのが先生。誰  
か始めたかわからないが「テロテ——」  
と言うのは宇野君のまね。何か思い通りにいかないこ  
とがあると「ウヤシイケレド——」  
と歌い出すのが持に先生。「ウハウハ——」  
と意味の通いぬ言葉もまたと使ったのである。か  
どん言葉も、これにはかなわなかった。皆ズッコケて  
しまうのである。それは「ハイ！ ヤメター——」  
水も角田君以外の人が使ったのでは味なくなるか  
ら不思議である。

### ※若さ||体力?

合宿も半ば過ぎになると各班とも疲れがめだた  
くる。進度もまよまよまで調子良く行っているのが地  
形実測、拓本、復元、で調子悪いのが工器実測、石器  
実測である。復元班では一生懸命仕事すると思えて、実  
測必要土器がふえるのである。石器班は、と上台山冬  
も終え夏の半分まで進んだところ。先生の検査が行な  
われた。その結果、自然石が大部含まれていたの  
自然石との見分けもできないうんて、とショックをうけた  
ものである。それに半分は没となってしまう。というよう  
な様子で、目の小さな人は、ますます小さく、出てくる人  
はますます出、目の前は千ら千ら、……。そこで、

二十五日は、体力増強の竟もあってソフトボールを行な  
た。一、二年生と、三、四年生、先生堀合さんに分か  
れた。当然若い一、二年が勝つてあろうと思っただけが、  
十二対三と九点も離されてしまった。その後追いつめ十四  
対九、十六対十四、と頑張った。二点差まで追いつ  
めても負けは負け、若さはあっても技術はなかった  
のであろうか？ 又若さに関連あるかどうかはわから  
ないが、合宿後半の朝はつらいものである。合宿初め  
なかなか寝ず水不足朝も早くから目のさめる人も、たんたん  
朝は起す水なくなる。食事当番である人は、皆より少な  
くとも三十分は早く起きなければならぬである。一  
年生の女の子は目ざまし時計の音さえ耳に入らない程  
である。それなのに食事当番の時にももちろんそうでない

時でも早く起きる人がいた。熟睡できるのである。早く  
からラジオ片手に廊下を歩き窓辺にきては「ア、ア」と  
いうようにたの息が何だかわからない声を上げるのであ  
る。朝食になると「おまんまだぞ、へエ！ 早く起きない  
と食ってまうぞ」と叫んだのであった。

※許して、(石器だけは)

八月二十七日で石器班を除く他班はほとんど仕事を  
終えた。そこで手のあいた人は、石器班にうつることになったの  
である。約七十個の石器が残っているから一人五個程実測す  
ればよいのであるが、一個につき三日もかかっていた。合宿中  
には終わらない。それなのに「石器だけは許して」と他に何  
かの仕事を無理に探し出している人がいたので、これもその  
気持ちすごく良くわかった。ちやう。

三十一日にもなる。他の仕事を探すにも何も見つからず、  
いよいよ石器を相手にしなければならなくなった。後半は  
ほとんど石鏃を扱っていた矢田さん、思い通り仕事はかど  
らないこと、疲れでイライラ、班員は別にサボっていたわ  
けではないけれど、皆に手伝ってもらっているという肩身の  
狭さにシヨンボリ。でも心の中では「どうだ、石器実測の  
きびしさ、わかったか、なんて思っていたかもしれない。  
フィッシャーやリッジが現わ水でいるような石器を、実  
で書いたたり、実がザツだ、たりで長い合宿の終りの夜  
水き、た皆の目は細かな部分を見るような注意力を失って  
いた。九月一日には打ち上げコンパをしたのであるがまだ  
仕事も完全に終わっていない。皆はどこかスッキリしていなかっ  
た。二日は午前中で終わる予定であったのだが仕事か

終わらず午後八時頃まで続けた。それでも終わらなかった  
者は、宿題として持ち帰ることになり三週間続いた合宿に終  
止符を打った。

※ 八月二十一日

昭和三年八月二十一日は我が城西考古学研究会の顧問  
である貞末堯司君が誕生した記念すべき日なのである。し  
たが、本日は満？歳の誕生日である。前日までは「二十一  
日は僕の誕生日だぞ」となどとおっしゃっていた先生も何故か  
しよんぼりしているのです。きっと二人分の手と足の指を使って  
も数えきれない自分の歳をなげているのではありません。  
発掘をしても我々学生に負けられない体力を持って、いよいよと  
ても気が荒くていらいやるのに……しかし、今合宿で、先

生の口から一番多く出た言葉は、

「ああ、肩こったナァー」

「腰痛いナァー」

なのです。それも曰かたつにつれて、

「僕、肩こっちゃったナァー……〇〇さんどう思うの？」  
になり、

「肩こっちゃったなァー……お前等どうにか思え」  
になったのです。そして考古特有のはやり言葉にまで  
進展してしまつた。

先生のなげきはさておき我々部員は、誕生会兼コンパ  
が開けると胸をはずませたのでした。朝倉ちゃんが元アルバイト  
をしていた川越のケーキ屋でケーキを買ひ、ロソク  
まで準備したのです。普通ロソクは歳の数立てる

のですが十二本位しか立たなかつたのです。その晩の作業  
は中止八時より誕生会開始、教室の電気を消し、ロソク  
に火をつけたケーキ登場これこそまさにクライマックス、い  
きに火を吹き消した先生に皆で拍手を送った。さて  
ここからコンパに入つたのです。中川さんが九十業さ水で  
からは歌が少なくなり、ちよと寂しい感じであつたが、途中  
から皆の勧めもあつて皆様おなじみのグズラこと、武田  
君のドンパ節が始まつたのです。

ドンドンパンパン

ドンパンパン

ドンドンパンパ ドンドパッパ ドンパンパー

松の木切れば たり下がる。

以下長々と続く。

そ水から小さく切ら水たケーキが回わってきたので、そ  
水を食べながら歌が続いたのです。こ水をきっかけにエゲ  
ツナ〜イ歌や、宇野君の愛唱歌、軍歌がはじま  
ったのです。お腹一杯食べて飲んで満足したからかは、  
わからないうが、ピーナッツ・おせんべいなどを人お的に投  
げはじめたのです。その主犯はといいますと、……殺される  
いけないからヤメヨ。

窓を開ければ虫が入ってくるようなむし暑い部屋の中で  
一時間程はガマンしていったのですが、人間はやはりすずしい  
所を好むものでして、大半の人は外やら屋上にくり出して  
しまいました。

ここでもよとした事件がおこったのです、読者諸君には  
足りない部分を自分で補ない想像をしていただなければな

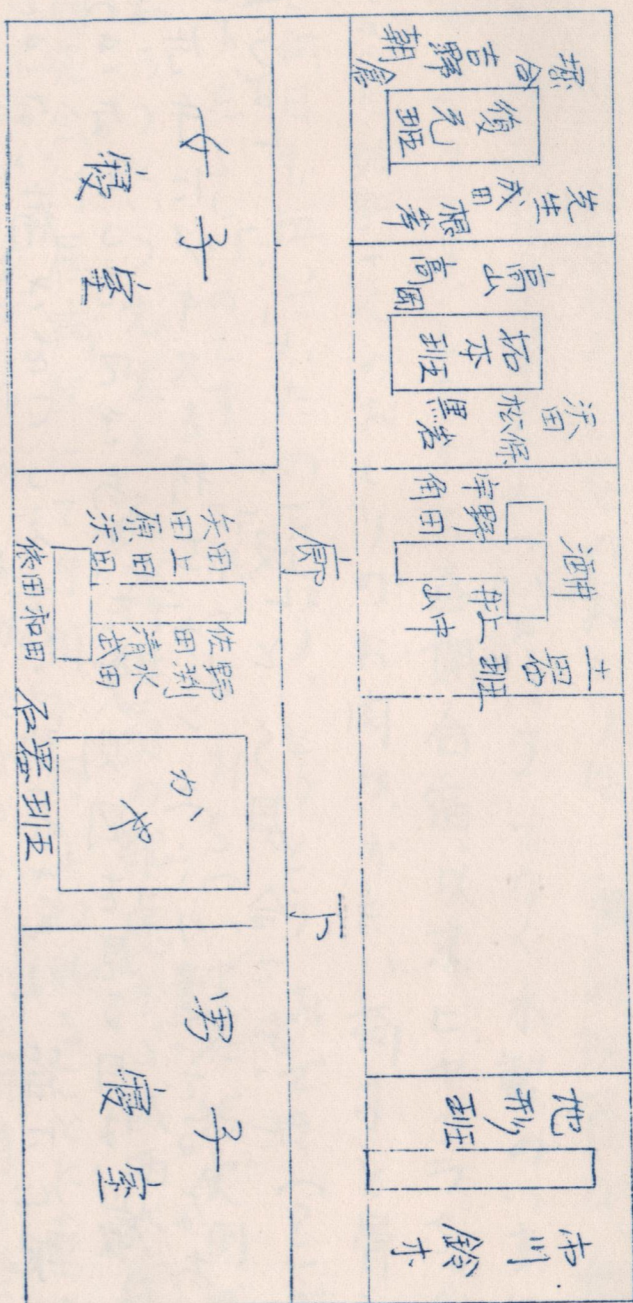
りません。

二号館の前では数名、歌などうたいながら涼んでいたの  
です。と、突然「オーイ、や、ちやうぞ」という声か上方から  
するではありませんか、その晴天から降ったかどうかはわ  
からなかったが、驚いたのは下のベンチにいた人達です。  
高い所で見下しなからなら、さぞ気持ちよかったです。あろう、  
しかし何分にもアルコールが入っているのです、本体まで  
降ってきたは大変である。二、三人の先輩が階段をか  
け登りやつのこと下へおうしたのである。ここれで一安心  
をしました。

※改名 八月二十三日(日)

この日石器班において、非常に大変な事件がおこったので  
す。





＝某日の整理合宿配置図＝

へイ!! 水が出た!!

合宿も中ばに入り、そろそろ体の調子がよ  
 くなつて来た頃であつた。我々、和田氏、武田  
 氏、山中嬢、朝倉嬢、依田嬢、それに私と他  
 二、三人で、時々大学の前にある「若柳」に疲  
 れをいやしに酒を飲みに行つていた。あのま  
 した。疲れをいやすと言つても「若柳」のま  
 すと酒を飲んでもおもしろくなく、あのよう  
 な、ガリツトの壁のぐさぐさしたような顔  
 を見ると、発振が思ひ出さぬ、よけいな疲  
 寝れなくなるので、なるべし、この顔だけ  
 見ないやうにしていた。  
 「和田、ちよつと腹がへつたな。」

「そうだな、ラーメニでも食べようか?」  
「ちよつと、ラーメニニッ早くしてね。」  
出て来たラーメニを食べてみると、どこかで  
食べた事があるような味がするのでした。  
「和田、このラーメニどこかで食べたことは  
ない?」  
「そうだよ、どこかで食べたような気がする  
。し」  
「そう言いながり、見るともなしカウニターの  
中をクルクルと、のぞいてみると、そこにあった  
のは、なんと、イニスタニトラメニの袋で  
あった。ここは飲み屋で、ラーメニ屋ではないの  
です。ここはイニスタニトラメニが出るのは  
めかるのですが、このイニスタニトラメニ

皆さんごぞんじかな。一匹の犬  
メニ、これはイニスタニトラメニ  
最も安く、最高に安い時で一個十五円程度で  
一般に売られていた。これは「苦柳」  
では、ラーメニ一ぱい百円です。これを「苦柳」  
のです。我々は頭にきて、もう二度とこんな  
ラーメニを食べるものかと言っておりました。  
こんな事をしながら飲んでみると、店の戸  
まがらうと、我々は、だれか入って来た者が  
ました。我々は、だれか入って来た者が  
ると、そこに立つて、角田氏では、角田氏  
りません。角田氏は、両手にサニダルを持  
ち、素足で入って来たのでした。そこで角田氏  
は、いきなり、「ハイ、水が出た。」と言った。

のである。角田氏のあの様な格好を見て、我々  
は笑ひ出しそうになつたのをおさえて「水が  
出たつて、何のこゝだ？」と前を返すし、  
「ハイ、もうおのふくも、さういふやよ、  
我々は、何のこゝだ？」と前を返すし、  
にかく大学にもどつてみることにしたのだ  
。大学にもどつてみると、大学の中は一面  
水びたしになつておりました。水の生所は、  
二、三日前に降つた雨が、屋上の排出口が  
まつていたために、屋上にたまり、排水口か  
つが突然開いたために、そこに多量の水が入  
り込んで流れたのだです。へ排水口の開いたのが  
原因か、それとも黒岩さんが屋上の水に落ち  
たその片足の分が原因か？  
二、三日は、知つて

いる人も少ないと思つた。この二、三日前、  
黒岩さんが一人で屋上に行つたのである。何  
のためにかはわからなかつた。と、かく行つて  
一歩、足をふみ出した所、ボキヤ、ボキヤと  
水の中に落ちました。たのめである。し  
屋上から落ちる水のカは相当なもので、下に  
ある二、三ホールのふたを飛ばしたのだ。下に  
此だけならばよかつたのだすが、この後がた  
いへんだつたのだ。屋上にたまり、た多量の  
水は、細い排水管一本ではどうも、流れ切れ  
ず、排水管の中で逆流を生じたわけである。二  
の逆流した水が、ランダムにある排水口からあ  
ふい出したり、たまりません。その排水口は  
下層、我研究室の二つと、なるりの室を通過して

いるためトその室から水が出たのである。この  
水のためト、我々には、アニヤ、モッブなどを持  
つて水をかき出したのである。結局、午前三時  
ごろまでならんだかんだして、やつと握られた  
ゆけです。が、次の日の頭の痛かったことは、  
ゆけらぬまませんでした。

川越祭りの日の出来事  
十月十四日(水)

雨天であつたのだが、いつものように作業  
を行なつた後、川越祭りに見に行くことに決  
定、メンバーは、南さん、矢田さん、井上さ  
ん、清水君、和田、山中、朝倉、依田であつ  
た。

坂戸町で電車乗り換えの時、例によつて空  
席を求めて車中を前方へ進んだ。例によつて空  
がさめるばかりのブルームの着物を着た女性か  
すわつていたの、皆の足は止まりました。女性か  
も本当は空席があつたか、なのだが、それば  
かりでは無いようであつた。しかしその女性

の隣には、恋人らしきあるいは御主人らしき男性がいたのである。その彼の左隣に、依田、朝倉、山中、和田の順にすわった。

「オッ—カッコイイ着物を着てる—」と言つて、例の女性の前にすわったのが、矢田さん、その右隣に南さん、清水君、井上さんでした。例によつて考古部員のこと大きな声でしゃべつていた。

矢田さん「ヨッチンだろ、涼子ちゃんだろ、山中さんだろ三人共そ、ち側にいるか」

清水君「ほんとうだ。そ、ち側の電車の車輪傾いたぜ。」

十月十四日(木)

依田「ガパンクしちゃう。へエ—電車の車輪。てパンクするの？」

清水君「皆わかっちゃないんだなあ、笑わせてやろう。」

そのうちに、目の大きさが話題にあがった。南さん「矢田君は、目の大きな人の方がいいのよネ。」

その隣の清水君、南さん指して目が細いとジエス4ヤ—をする。それを知つて南さんがにふんでいるのもしらず、おとくのジエス千ヤ—を続けでいたのである。や、と気づいて赤くなり顔をかくした。

清水君「そんなに見ないでエ！ 恥ずかしいか」

さ。俺を見るな。矢田さんを見てよ。皆一斉に矢田さんを見たのである。

矢田さん「オイノオイノ。何だよ、見るなよ、やんちゃうな。」

と赤くなつたのであります。電車中の人が我々に注目していた時に、矢田さんは赤くなつた顔をかくすためだつたのか何なのか、「オイ・ヤメロ」と突然ワシタツ子傘を広げた。今まで笑うのを少しこらえていた涼子ちゃんも笑いが止まらなくなり大變だつた。※例の女性も「あーおなか痛」という程笑つていた。電車一両中の人達が笑つていたのである。

そんな時に

清水君「ヘー、電車の中で傘広げる人なんて初めてだ。雨もりでもするのかな。」

なんて言うものだから、また笑う、と言つた具合に、川越市まで笑ひ通し。腹筋の運動を行なつたのである。

雨天のためシートをかぶつた山車しか見ることができず、太鼓の音だけ聞きながら、南さんの買った綿菓子も皆で食べながら市内を歩き回り、喫茶店で、山車が見えなかつたか、やけ飲みをして川越を後にした。

注

やけ飲みでもアルコールにあらず、ブルーマウンテンかキリマンジエロかコロンビアモア

かは知らなわけ水ど、コーヒー又はレモンスカッ  
シユであった。

※何故、涼子ちゃんが笑いをこらえていたか  
というところ、御存知のかたはすぐにはわかると  
思っているのであるが、そのころの朝倉式笑いの方  
は、無声笑法であった、そのため一度笑いの出  
すと、死ぬ程の思いをするのである。そんな  
な思いをすれば、おかしなことでも笑いの  
をこらえる方が楽であろう。しかしよほど  
のへりまがりでない限り、笑いをこらえる  
こともまた大変な事である。そこで先生が  
考えた笑いの教室、その講師が貞末先生、  
沢田さん、矢田さん、佐野さんであった。

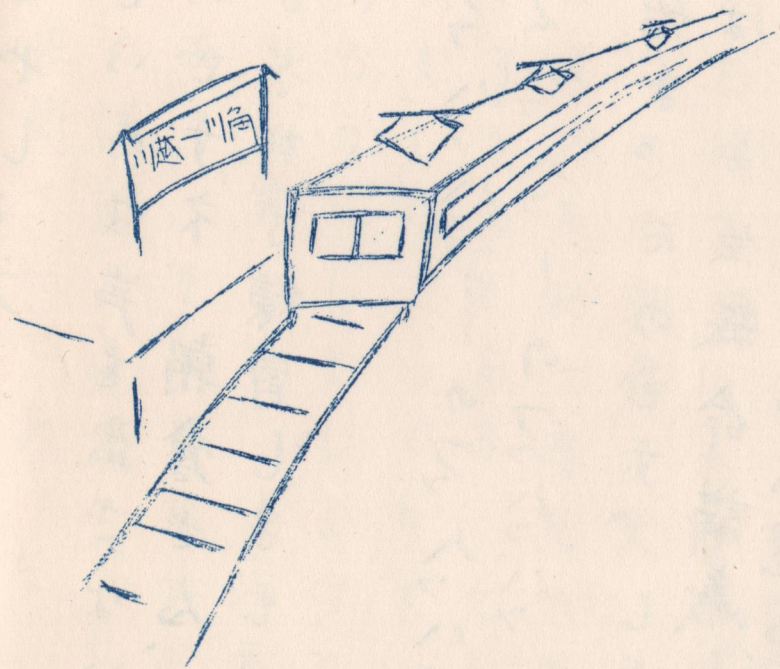
笑いの教室を御紹介致しやしょう。

講師「ハイ、笑って苦しめるのは声を出さない  
からですヨ、いいですネ、朝倉さん、  
ですから声の出し方から練習しましよ  
うネー。」

「では一、二、三、ワッハッハッのワッハッハッ  
はい、一緒に、ワッハッハッのワッハッハッ。」

とこのような調子で始まったのです。しか  
し、御本人の朝倉さんは、一生懸命講義し  
ている講師達を見てまた笑って苦しむ思いを  
したので、しかし講師達の努力のかけが  
あつたのかどうかはよく知らないが、現在、

苦しい思いをしなくとも笑えるようになって  
いるのです。



### 高麗祭（住居復元）

七月十日の部会において今年の学祭は二年  
前に住居の復元が好評だったので、より大き  
な住居復元をし、集落を作ろうではないか。  
ということになった。そこで班長をきめるこ  
とになり、そして班長はまるで住居のことは  
しらない私にきまっていたのである。次の日から  
私は先輩たちに本をかり徹夜で住居のことを  
調べた。しかし住居の種類は書いてあるが、  
作りかたになると何も書いてないのである。  
しかし徹夜の成果もでてか、二週間で設計図が  
できあがった。後は材料をあつめるだけであ  
る。この材料あつめが四苦八苦だったのではあ

る。これかゝるその四苦八苦をこまかく書きだすことにする。

彌生時代の住居を作るのであるかゝる柱は四本である。それも太いまっすぐなやつが必ずやなのであるかゝるそれを捜すのもたいへんである。そのうち私たちは、大林組が体育館を作っていることを思い出し、そこへ忍び込めば何かあるのではないかと思ひ私(和)田、酒井、武田、(他)は大林組の作業場へ潜入したのである。……時は、太陽も西へ沈みかけあたりが薄暗くなるころである。それぞれドクトクの作業服を身にまとい、人目(とくに学生部)をはばかりながら作戦を開始した。アンノジヨウありました、体育館の裏にみづみ

後、この自動車はつかわずリヤカーにしたのである。リヤカーの方かべんりだったのはおどろいた。学校のカーを全部刈りとり、高麗川のカーを刈ってもまだたりず、歯科大の裏の酒屋オカベの前のカーを刈ってもまだたりず、カヤ、カヤ、カヤ、といてみるまで捜しまわり、夢の中までカヤが出てくるほどであった。千キショーカヤ

てなことを言っているうちに材料もそろいよいよよ組立てることになった。場所は食堂と経済塔の間である。六メートルの隅丸方形住居址を作り大林組かゝるただいときた柱を立て、屋根を作ろうとした時、矢田さん、市りさんが和(和)田、和(和)田と大声でさげんしているの

である。

和田、この設計図でいくと屋根の高さ、こ

なもんだぞ。と、いつて自分たちの頭を指さしているのであ

る。そんなはずないすよ。私はなっとくいかず自分で組立ててみることにした。しかし何度も何度も組立ててみるも

高さは一・五メートルぐらいなのである。設計

図では三メートルなのに、なぜ、なぜ、オシ

エテ……私はこの時ほど穴があったら入

りたいたいと思っただことはなかつた。

しかたなく、設計図は全々つかわず、目分量

で作ることにした。みんなで声を出し、もう

されていゝのを発見。見つければ後は私や酒  
井のやること罪の意識全々なく四本といわず  
八本もカツパラってしまつたのである。それ  
も帰りは学生部の前をどおと通つてきた  
のであるからさすがである。

柱を手にした。こんどはそのまわりをかこ  
む支柱である。この柱の条件としては細くて

長いやつである。材料はすぐ見つかつた。そ

れは高麗川の南斜面に、いっばいある檜である。

しかし檜百本ともなると大変である。こうな

ると柱をいただいてきたときのように薄暗く

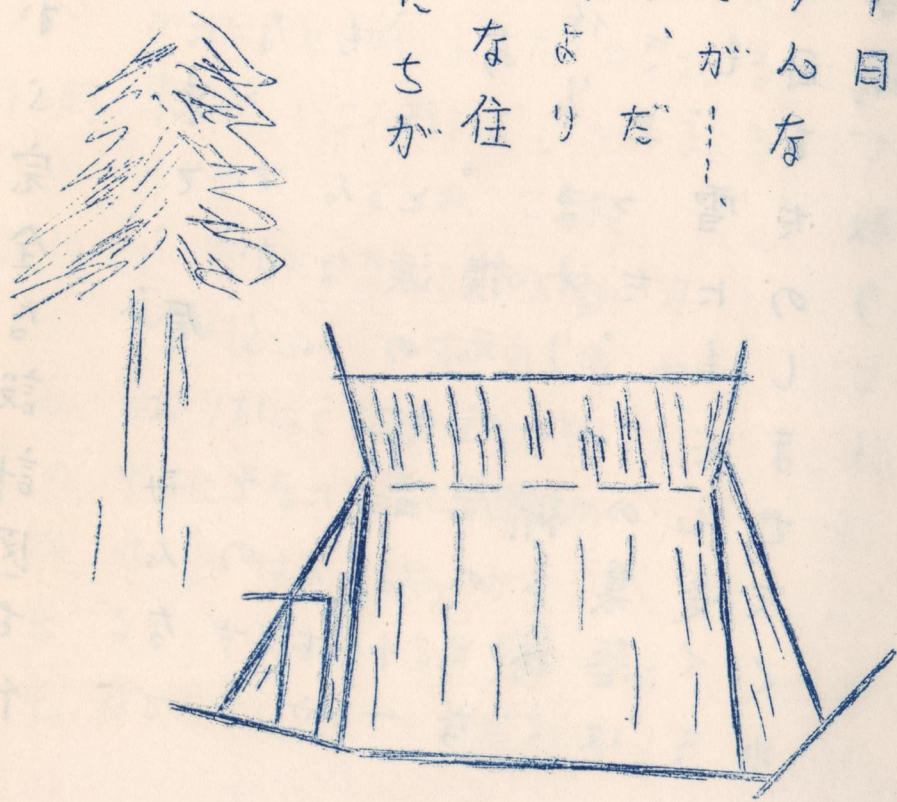
なつてかゝるかはわかつた。みんな授業  
昼まかゝ切りたおすことにした。檜百本そろ

そろ切りたおした。檜百本そろころ

には、いままで経済学部の校舎から高麗川は  
椀にじゃまされて全々みえなかつたのである  
が、それが見えるようになってしまったのである  
あるからすごいものである。  
最後の材料はカヤである。カヤ刈りには、  
カヤを運ぶ足が必要なので自動車部から一ヶ月  
五千円で自動車を借りた。この自動車がまた  
オンボロですぐエンジンをおこすのである。  
そのたびに自動車部を呼んでおこすのである。  
あるから、時間のムダといつた。たふはなはだし  
かつた。高麗川の下流にカヤを刈りにいつた  
時などは、バッテリーが車体からはずれるな  
どの騒ぎもおこり、その時には私の靴ヒモ  
でバッテリーをゆわえつけたりした。それ以

少し上だ、下だ、といいながら骨組を完成し  
た。私は骨組ができてから完全な設計図を作  
ったのである。  
日曜日も休まず学校に来て、昼はみんなで  
ヤキイモを食べ、暗くなつてからはその中で  
火をもやし、昔の人々もこんなふうに家を立  
てたのかと考えるが、汗と涙の結晶は十一  
月八日に完成したのである。復元住居のとな  
りには、円形住居址を作り、まわりに柵をめぐ  
らし、リップパな集落が出き上つた。この集落は  
埼玉名物秩父おろしにも、雪にもたえ長くそ  
の姿を見せ、私たちの目をたのしませてくれ  
た。しかし大学側の要請で取りこわすことに

なったのは翌年の三月である。  
 製作月目、4ヶ月かかっ  
 たのに、こわすのは半日  
 であつた。その時、みんな  
 の心の中にはさびしさが……、  
 しかし今度作るときは、だ  
 れにもこわされず、前より  
 も、もっとも、とリッパな住  
 居を作ろうと思つた。た  
 いない。にちが



川に入リ、高麗祭が始まつた。今年の展示  
 は、夏の合宿で、発掘をした所が遺物がまつ  
 たく出ず、このため展示の手法は今、我研究  
 室にある遺物を年代順に分類して展示しよう  
 としたのであります。一年生は、縄文の文様  
 を調べてこれを分類して説明する事になつた。  
 2/6の教室では、夏の合宿で行なつた土器、  
 石器、地形などの実測図を展示し、また実測  
 の手法を説明する事になつた。これで一つ我  
 研究室始まつて以来の新しい試が始められよ  
 うとしていた。展示場所が一ヶ所余つたので  
 ある。それは、廊下に展示をしようとしたの  
 である。しかしこの展示とを一つでも何か変  
 えたものをしようという事、色々と案が出さず

た。たとえは、矢田さんの案で当時は、サイ  
クといふ言葉が流行していましたが、我研究室  
もこのサイケイリックで行こうということに  
なり、四ヶ方から色つきのライトを照らし、中  
に土器を置き、この土器を前衛的芸術から表  
現しようとするのでした。まだ他に色々案  
が出されたのですが、結局のところ、廊下の壁に  
は、壁画などを画き、廊下の中央には、矢倉  
を組んでこれに土器を展示し、そのまわりに  
ろうそくを立てて、廊下の窓を暗幕でおおい  
暗くして、一度、利屈の様な感じにしたので  
あります。

### 春期合宿

#### ○場所探し

昭和46年の春期合宿は二月一七日〜二八日まで行  
なわれた。昭和目・愛宕久保の発掘ではあるが、この合  
宿に関しては、一〜二月も前から準備はさしていたのであ  
る。

まず発掘の場所探しである。場所と言えば家のあった  
所である。とは言っても大昔のこと。〇〇線△△駅より  
徒歩十分ガス・電気水道完備という人為的なもので  
はない。さしずめ日当りが良く水源に近く、水はけが良く  
などと全くの自然的条件なのである。次に場所は適してい  
てもその地目が問題である。住宅地はもちろんだめ、畑でもそ  
こを発掘するというわけにはいかず、結局空地を探すよ

りないのである。こうなると範囲は狭まる。真冬の寒風の中を「空地はないか……」発掘に適した空地、空地はどこかと探し歩いたのである。

その結果、入間郡坂戸町夕和目と日高町愛宕久保の二箇所が決定したのである。

続いて台宿場所探し、結局これは夕和目神社に決定したのである。浴室はないが、トイレもついており簡単な炊事場を作り、この夕和目神社で思い出に残るような工ボードが展開されるのである。

### 「メニバー」

貞末先生、矢田・沢田・市川・井上・根岸・鈴木・和田  
酒井・武田・高山・朝倉・依田・小中・角田・宇野・清  
水・吉野・沢田(二)・高岡・田上・成田・黒山

### 。真冬の発掘

二月は立春が過ぎたとは言えまだまだ寒いのである。雪の降るのも二く三月が殆いし、赤城おろしや秩父おろしが猛威を奮っているのも二月である。この厳しい寒さの中での発掘は非常に忍耐を要するものである。

服装、真夏では裸の男の人達も冬はそういうわけにはいかない。二重にも三重にも着、頭から足の先まで全まをおおうような服装が良いのである。あいてみるところといえは顔だけである。中には顔こそおおた方が良いという人もいるが顔がなければ誰だかわからないし見えないし、それになんたっで食事ができない。だから顔だけは出しているのである。

スコップを持って掘っている時は暖かくなるのだが、休んでい

みんな良く働いたとみえて顔といい手といい真黒け。でもおふろが問題であった。寒い夜をお風呂に入って暖まりたかったらうに、かぬいそうに男の人は三日に一度の割りであった。その点せの人は福島荘まで毎晩入りに行ったのである。やはりせの子は美しくなくて、はという配慮のためであるうか。行く時はうす暗くても帰る時はもうまっ暗である。人それぞ性格の違ひというのが、お風呂の帰りにもそれが出るのである。Tさんは常にマイペース。皆が早くも遅くも常にマイペースでドンドン歩いていくのである。Kさんは寒いから暖かくなるようにと走って行きあとは大体集団になるのだが、途中のお墓の近くまで来るとまた反応が変わってくる。全然反応なしがNさん。誰でもいい隣の人に寄りそい腕を組んで離れないようにする

のがTさん。お墓が二つなのである。最も反応なしのNさんはお墓があったことなど知らなかつた。そうなる。知らぬが仏とはこのことなのであらう。

前にごま付昼食の様子を述べたが、夕食の様子もまたすさまじかつた。座れる位置がまたおもしろく普通なら上座といわれる床の間の方に目上の人や座れるのであるが、ここは少々変わっており、ここは一、二年生が占領し、続く下座へ三年生と先生と、といういわばおえらい方が座るのであった。一斉に「いただきます」と食べ始めるのであるが、違い人が一口はしをつけたかどうかの間に一、二年生はもう二膳めのおかゆり。その様子のすさまじさ、生存競争のあの食物に対する執念の物すごさ。どうやったら人より一膳よけいに食べられるかを発掘の間中

考えているのではなくるかとも思われるすばしこさ。  
現代はこうでなくてはならぬのか。世はますますスピード  
時代なのだ。

。どちららが被害者か

これは是非とも一代目ごある私が書かなくては  
ならないような気がするので、一筆書かせていただくこ  
とにしました。加害者と被害者の幸・不幸の問題  
追求の使命があるのである。

世の中は変わった。今では交通事故などを起こし  
加害者となってもその賠償金などで財産までなく  
し一生その重みで苦しむ結局どちらが不幸になっ  
かわからない事件が起こってきている。ここではこ  
のような心の痛みなどについて問題を追求してみ  
たいと思う。

一代目としては前集で名入りで書かれましたが、  
二代目は純粋可憐な一代目もそうであったの  
だが、乙女であるのであえて名前前は書かないこと  
にしよう。Sさんとでもしよう。

鬼は外、福は内ではないが、Sは外、内は貞末  
先生であった。最も中が先生や一代目の清水さん  
でなかったらこんな大きな問題にはならなかったで  
あらうが。運が悪かったのである。その場面を再  
現してみると、先生が中で奮闘中であった時、Sさ  
んが鼻歌まじりで来たのだそうである。そして次の  
瞬間、事件が起こったのである。

その夜、先生が被害者になったのがよほど嬉し  
ったのだらうか。得意そうに話しているのと対称  
的にSさんは泣き出しましたのである。何と一

代目と二代目の違い。私はその晩はとうとうトイレには行かなかつたが、Sさんはどうだったか。こまごま私にはわからない。Sさんはよほど罪の意識を感じたのか、または見てはいけぬものを見ました。恐怖からのその話になると気持ちが悪く感じました。被害者になつたというのである。

それにしても後継者はまだ出まないのである。二代目としては合宿のたびに不安と期待がいろいろあるのである。皆さん、三代目にならないようにしてあげよう。ノックするのであります。また中の人により

一層注意する必要がありますよ。

。にわとり

私は、合宿に二日遅れて十九日から参加したのである。何とその日の夕食は鳥肉のオンパレード。「すごい、こらさうの。へいっもの合宿に比べて」と喜んで食べたのに、なぜか他の人は箸もつけない。沢田さんなど箸で鳥肉をつついてみるだけである。それもさうはず、後がぬかたうだが、そのにわとりは自分たちで生きているのをつぶしたのださうだ。そんならさつぶした本人であれば食べられぬはず。生きていた時のことを想像するとしても食べるという気が持たない。そうとは知らず、パクパク食べていたのは来たばかりの鈴木さんと私。ただただ皆が食べないのを不田心議に思つただけであつた。

鳥肉料理もこう毎日続くとあきがるものである。そこで女

の子が苦肉の策で考え出したのがここのである。余った肉を乱切りにし、甘塩はよく煮つけ、楊子で肉ダシゴ風にさし、形よく並べるのである。人間なんて単純なもの。同じ材料でも姿形や味が変わると結構食べるものなのである。あつという間になくなつてしまったのである。

### 。グズラのお母さん

この合宿中の食事のメニューは、四枚からいって一人一枚に盛り分けたい。であった。ところが、ある日、これが二枚になったのである。ということはいつもよりおかずが増えたのである。これは、グズラのお母さんがいらつしやり、比叟の食事のお世話をしまつたからなのである。

栄養士であるグズラのお母さんは、合宿中の我息子のことをおもい、つらい肉体労働で一〇Kgが六〇Kgにやせは困るとい

願していたのであろう。それとも、合宿中の比叟さんにおいしいものを食べさせてあげたい、という母心からであらうか。どちらにしてもグズラのお母さんには感謝のしどころであった。合宿でホームシックにかかた人たちも久し振りに「おふくろの味」を味わうことができたのである。息子のことを想う母、そのお母さんのことを想う息子。この日のお母さんにはグズラもどんなにか感謝していたであらうか。あとでグズラがしみじみと語っていたそうである。ほんとうにありがとうお母さん。

この日の食事当番は高山さんであった。一日中お母さんのそばにいて手伝いをしてきた高山さん。身体よりも気疲れの方が多かったそうである。ふだんでもちょこちょこ動いてる高山さんがこの日はそれ以上に動いたのである。

夜の食事はとても美味しかった。合宿中の食事では味わうことのできない、また私たち若い人には苦手な煮ものを上手につく

つてくださったのであつた。まさにはおふくろの味なつた。グズラはステキなお母さんをもつて幸せですね。といいことを書いてみると、このような影の音もあるようだ。

「バカな息子ほどかめいいてね。」

## 。破損

### 一、茶櫃

この合宿中の写真を見ると、朝倉さんがほうきで土俵を掃いているのがよく目につく。それもそのはず、彼女は自分の職業をそのまゝこの合宿でも発揮させていたのである。しかし、こゝのように書くと朝倉さんに失礼にあたるので、種を明かせばこうなのである。

ある日、朝倉さんが茶櫃を持って炊事場へ行こうとしていたところ、とこがそこ三く五センチメートルほどのコンクリート

の段があり、運悪くあるは相手を間違えたのかそのコンクリートと相撲をこつてしまつたのである。それでひざを怪我してしまひ、曲げることができず、したがってほうきを使う仕事になつてしまつたのである。またまた誤解されようであるが、題に「破損」としてあるのは、決して朝倉さんのひざを破損したことをさすのではない。もちろんコンクリートもさすのではない。破損とは茶櫃のことをさすのである。念のため、こゝでその茶櫃はバラバラになり、見るにたえない形になつたのである。

### 二、障子及びガラス

夜の自由時間のさめぎは物凄かた。発掘の時には疲れたような顔をしている人たちであつても、こゝ、夜ともなると目も身体もさえてくる、うりかつた。日頃の習慣とは恐しいもので、合宿でもそのまま出るうりかつた。ドタンバタンと音をたて、甲にはふとんや枕まで

投げる人もあった。こゝにはいくら丈夫がとれるの多和目神社でも  
もたないのだ。メリッメリッがチャーンと音をたて、障子のサシとが  
ラスが割れてしまった。ところが、翌日、矢田さんたちがガラスを買い  
に行ったのはよかったが、一回目、模様が違い、二回目、大きさが違い、  
三回目にやっとどうにか納まるとのである。

### 三、ふすまの枠

次に物薄いさしぎの犠牲となったものはと云えば、ふすまである。  
女子の部屋と男子の部屋の境々ふすまの漆塗りの枠の一部  
がとれてしまったのである。貞末先生以下皆が「大変だ大変  
だ」と騒ぎたて、どうするか、処置に困ったのである。障子  
のサシのように、ひもではっておくわけにもいかず、かといってそのま  
まにしておくこともできず、な、頭をしばって考えたのである。

その結果、我々は考古学研究会であったことに気がついた。こゝには

ら接合、復元は得意中の得意のはずであった。セメダインをつ  
け、ゆれた部分を貼り付けたのはよかった。ところが、やはり割  
れ目が白く木肌が出てしまふのである。また思案の結果、黒  
のマジックインキで塗ることもかすことにした。漆ほどの光沢は  
ないが、ますますの出来映えであった。接合復元バンザイのである。

編集後記

我々五期生の卒業に際して  
この一刊を編集できましたこ  
とを幸いに思いまことに共  
この四年間御世話になり  
ました貞末先生ならび諸先  
輩に深く感謝の意を表  
します。五期生代表

和田宜久

清水公一

「城西考古の歩み」第5部 1970

編集 考古学研究会 第5期生

発行 城西大学

印刷 考古学研究会

編集委員 和田宜久 山中史子

酒井正幸 朝倉涼子

武田勝美 依田和江

昭和48年3月発行

乱丁、落丁の際はお取り替致しかねます。

